

< 牧師室から 2020年04月26日 >

「お母さん、お父さん、ありがとうございました。さよなら。」と言いながら家を出る私たちの車に向かって、曲がった腰でお母さんが手を振っている。傍らに立っているお父さんも無言で笑っている。何回の手術のせいか、お父さんも前より痩せた気がする。

コロナウィルスの中で、ゆっくり話もできず、マスクをしたまま、庭でワンちゃんと荷物だけを受け取っての帰りだった。

引越して、犬を先に実家に預けて、もう一か月が過ぎたので、海老名に戻すために来ていた。帰りに何か買って食べて、と、いつものように私のポケットにお金を差し込んでくださる。もう孫がいるくらいの年齢になっても、いつまでも子供であるのだ。体は大丈夫か、引越しは無事に終わったのか、何回も声をかけてくださる。

若い時は自分のことだけに捕らわれて親の苦労なんか、考える余裕がなかった。今になると、命を削るように生んで、生き辛いこの世の中で育ててくれたのだとやっと思えるようになった。子供が大きくなればなるほど、親の体は衰えていく。わが子のために眠れない夜を過ごし、悩み、苦しむ日々の中で、親の体はさらに削られていくのだ。

聖書の中には、神様の愛を親子の関係に譬えて語られたところが多くある。

その中で「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。(ヨハネ 3・16)」という聖句は私たちがよく知っているところである。

わが子を想う親の気持ちをあなたは見ているのではないか、その愛さえ捨てるほど、私はあなたを愛した、と神様は語っておられる。その私たちに向けられた愛によって、主は十字架の上で肉を裂き、血を流して、私たちに永遠の命を与えてくださったのだ。主の苦しみによって私たちは生かされている。

神様の限りない愛を、親の愛を通して垣間見ながら、帰りの車の中で涙がこぼれる。

(鈴木善姫牧師)